

ゲスト◎ フレッシュアーティスト賞／ピアニスト

# 萩原麻未氏

## いつも聴く人の心を感じながら 弾きたい

### プロフィール

萩原麻未（はぎわら・まみ）

1986（昭和61）年広島県生まれ。5歳でピアノを始め、13歳でパルマドーロ国際コンクールで史上最年少の第1位を獲得する。広島音楽高校を卒業後、パリ国立高等音楽院に留学し、ジャック・ルヴィエ氏らに師事。2010年、同音楽院修士課程を首席で卒業し、同じ年に開催された第65回ジュネーヴ国際コンクールピアノ部門で日本人として初めて優勝。伝統あるコンクールの8年ぶりの優勝者としても話題を集める。その後、ソロ・リサイタルやオーケストラとの共演など、パリを拠点にしながら世界各地で活躍を続ける若手実力派ピアニスト。



とにかく弾きたいという気持ちは  
すごく強かった

——萩原さんは幼少のころから国内外のコンクールで入賞を重ね、高校卒業後は海外で学ばれています。萩原 母がいくつか習い事をさせてくれて、そのうちの1つがピアノでした。まだ習ってない曲も勝手に練習するような子で、とにかく弾きたいという気持ちはすごく強かったと思います。

海外で音楽を学びたいという希望は中学生くらいのときからずっとありました。留学したパリ国立高等音楽院は世界中から音楽家の卵たちが集まる場所ですが、同世代の彼らが音楽に向かう姿は刺激になったし、自分の考えをはっきり言い合うのもすごいなと思いました。

——パリで師事したジャック・ルヴィエ氏に大きな影響を受けたそうですね。萩原 ルヴィエ先生には5年間習いました。とても厳しい先生で、自分の音楽が周りにどう聞こえているか、常にそれを意識しながら弾きなさいとよく言われました。初めて先生のレッスンを受けたのは高校生のときですが、私に足りない部分を的確に指摘してくださり、「この先生に習ったら自分ももっと成長できる」と思って、パリ留学を決意しました。

「経験のずだ袋」が音楽を豊かにする

——室井さんは卒寿（90歳）を迎えられましたが、毎日の練習は欠かさないそうですね。室井 ええ、ふつうで4時間、音楽会の前は8時間くらいはやりますね。面白いのはね、そうやって練習をしていると、この年齢でも発見がたくさんあるんです。「ああ、ベートーヴェンはこういうことが言

いたかったのね」って。もう、それがうれしくて（笑）。年を取ると「経験のずだ袋」が大きくなるでしょ？



ピアノだって、音が物語るってことが本当にわかるようになったのは70歳を過ぎてからです。それで早く死ななくてよかったわ、なんて思うわけ（笑）。

——その発見の喜びがピアノに向かうエネルギー源ですか？

室井 そう、その喜びといたら大変なものです。私の家の庭の草むらにモーツァルトやベートーヴェンが隠れてるのね。私がいい加減なピアノを弾いてるとみんなそっぽを向いてますけど、「この音だ」って見つけたときは、彼らが草むらから「いいよ、いいよ」って言ってくれるの（笑）。幼稚園児の想像みたいですけどね、それくらいうれしいの。演奏が私にいつも深いものを悟らせてくれるんですね。

もっともっという音楽を届けたい

——萩原さんは2010年ジュネーヴ国際コンクールで優勝し、一躍脚光を浴びます。萩原 最初に受付会場に行ったとき、それまで名前と演奏だけ知っていた同世代のピアニストがたくさんいて、そこに自分もいるのが不思議な気持ちでした。きつと演奏を聴いたらみんなすごくうまくて感動しちゃうと思って（笑）、コンクール中は演奏会場とホテルの往復だけでしたね。あの緊張感はどう二度と味わいたくないですね。ずっと眠れなくて、どンドンジーパンがゆるくなっていくんです。でも、こうして弾かせて

写真上：9歳のころ、PTNAピアノコンペティション全国決勝大会にて（第1位入賞）  
写真下：第65回ジュネーヴ国際コンクールピアノ部門ファイナルで喝采を受ける

ゲスト◎ 特別賞／ピアニスト

# 室井摩耶子氏

## 音楽は音で書かれた詩であり 小説であり戯曲なんです

### プロフィール

室井摩耶子（むらい・まよこ）

1921（大正10）年東京都生まれ。6歳よりピアノを始め、東京音楽学校（現・東京藝術大学）を首席で卒業。日響（現・N響）ソリストとしてデビュー、また早くからエリック・サティやポール・デュカスなど現代音楽作品を弾き、成功をおさめる。1956年「モーツァルト生誕200年記念祭」日本代表としてウィーンに渡り、同年ドイツのベルリン音楽大学に留学。研鑽を積み、ヨーロッパでも演奏家としての地位を築く。74歳から始めた「トーク&コンサート・シリーズ」は現在まで23回を数え、子どもから大人まで幅広い層の方々に音楽の楽しさを届けている。生涯現役を貫く世界最高齢ピアニスト。

もらう場所を与えてもらっていることに感謝し、音楽に身も心も捧げることで精一杯でした。

——その後、国内外で活躍を続け、紀尾井ホールでもリサイタルをされています。

萩原 2010年のハーピストとのデュオ・リサイタルが最初です。あのときは1曲目にフォーレのノクターンを弾いたんですが、紀尾井ホールは会場に音が溶け込むような感じで、すごく心地よかったですね。その数カ月後に紀尾井ホールでのリサイタルが決まっていたので、このような素晴らしいホールで再び弾かせていただけることを心から幸せに思いました。

### 音楽を読み解くために

——室井さんは「音楽ルール」の大切さをおっしゃっていますね。

室井 音楽は単純に音の羅列じゃなくて、すべての音が物語っているんです。それを書いた作曲家が何を伝えたいのかを知るには、読み解くための音楽ルールを知らなくちゃならないでしょ？ それを私は「音楽文法」と称しているわけです。

音楽ってすごく不思議でね、例えばピアノでよく「歌え」って言われますけど、そうすると日本人はみんな酔っぱらいの千鳥足みたいに弾いてしまう。そうじゃないのね。フォルティシモだったただ大きい音を出すのではだめ。選挙演説でも単に大きい声を出したって人の心はつかめないでしょう？ それと同じなんです。よく楽譜を見なさいって言いますが、詩であり小説であり戯曲である音楽を読み取りなさいって意味なんです。そしてその言葉を聴く人たちに伝えるのが音楽家の使命だと思っんです。

——日本でのキャリアを捨て、30代でヨーロッパに渡り、ゼロから音楽を学ばれたのはなぜですか？  
室井 私は21歳でプロデビューしましたが、ずっと

何かが足りないという思いが消えなかったんです。35歳のときウィーンに行くことになって、そこで本物の音楽に触れて、やっとその足りないものが何かわかったんです。それが「音楽文法」でした。だからこのとき、必ずこれを自分のものにしよと覚悟を決めました。ヨーロッパではプロの厳しさも教えられました。プロは学生とは違う、ただ二度でも失敗したら二度と呼んでもらえないってマネジャーから言われました。ピアニストとして生きることへの執念はヨーロッパで身につけましたね。

——演奏家としての抱負をお聞かせください。

萩原 音楽家にしかできないことであると思うんです。自分以外の誰かのために役に立てる、そんなピアニストになりたいですね。独りよがりではなく、常に聴いてくださる方の心を感じながら弾けるようになるのが目標です。

室井 日本の音楽に貢献できることをしていきたいですね。先日『演奏の秘密』というCDを出しました。ピアニストが自分の手の内を明かしているのって言われましてけど、聴いた方からは「なるほどと思った」という声をたくさんいただきました。私が若ければ手の内を抱え込んでいいでしょうけど、今さらねえ（笑）。今後も音楽のもっと深く大きいところを求めて、聴いてくださる方たちと一緒に、音楽の醍醐味に身を任せることができましたら幸せです。



写真上：ドイツ バイロイトでベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」を演奏  
写真下：2008年トーク&コンサート「音楽を聴きたいって何なの？」第19話にて